

# 木村秀海さんを悼む——その学問と人柄——

## 末 次 信 行

木村秀海（一九五二—二〇一四年）、享年は六十四。本名は「ひでうみ」といったが、私は「しゅうかい」さんと呼ぶことが多かった。時には呼び捨てることもある。私の方が半年ほど早く生まれ、就学年はおなじであった。

昨年（二〇一四年）の八月十四日、忽然というべきか、あるいは飄然と、われわれが目にする世界から、秀海さんはひとり飛び去った。何がしの前兆もなく、何らのメッセージもなくである。秀海さんらしいといえば、その通りであるが、いささかサッパリしすぎていやしいか、と故人に苦言を投げかけたくなる。前日の十三日、突発的な意識不明で入院されたとの連絡が、佐藤信弥君（本研究会幹事）から入り、後日、意識が戻ってから見舞いにと、楽観的に考えていた矢先の計報であった。意識不明になられた原因は、糖尿病治療をされておられたので、このせいかもしれない。あるいは、奥様が亡くなられた（二〇〇一年）から二人のご子息を立派な成人に育てられ、ホッとされた隙を病魔が急襲したのかもしれない。

われわれが最後にお会いしたのは、二十日ばかり前の漢字学研究会（七月二十六日、於関西学院大学・池内記念館）の席上であった。い

つものように私の隣に座られ、普段されるようにノートパソコンを起動させておられたように思う。後から考えてさえ、少しお疲れであったかなと感じる程度で、二十日ほどのちに、旅立たれる気配は微塵もなかった。

「天地は仁ならず」のたとえで、津波にさらわれたような、情け容赦のなさを感じるとともに、一瞬の気の緩みが大事に至ったのかなども思いめぐらされるが、しかし、こうなってしまっただけ、ただただ、ご冥福を祈り上げるほかない。

\*

秀海さんは、関西学院大学文学部史学科（東洋史学専修）を卒業後、大学院に進学された。大学院は「日本史学専攻」となっているが、ここで開講されている東洋史関連科目を履修し、研究を継続された（関西学院大学大学院のシステムについては「東方学会報」第五九号所載の「研究室便り」による）。この間、中国古代史については、非常動で出講されていた佐藤武敏先生の授業を受けられ、また、神戸大学に出向いて伊藤道治先生のところへ、松井嘉徳氏とともに殷周史、とりわけ金文について学ばれたと聞いている。さらに、白川静先生がお住

まいであった桂のご自宅にも一度伺ったことがある、とも語っていた。何時来訪されたのか、また何を話題とされたのか、これらについては聞いた私が失念してしまっている。

\*

本号掲載の著作目録にみえるように、研究者としての最初の論文は、一九八一年十一月に発行された『史林』掲載の「西周金文に見える小子について」というテーマであった。副題に「西周支配機構の一面」とあれば、秀海さんの西周史研究、あるいは金文研究の方向性が知られ、一九八五年一月には『史学雑誌』に「西周官制の基本構造」と『東方学』に「六自の官構成について」の両論文を同時に発表された。とりわけ『東方学』の論文は、第四回東方学会賞に輝いた。秀海さんにとって三十代前半が西周政治史を念頭においた金文研究にもっとも情熱を燃やした期間であり、西周王朝の官制の構造解明にひとつの結実を学界に残した時期でもあった。

この金文研究の特色は積読の精密さ、これにともなう文脈重視にある。この方向を軸として、文脈上要諦となる一字に対して、古文字学研究の基礎的方法をふまえたうえで、秀海さんらしいアプローチによる新解釈に本人自身が強烈な関心と興味をおぼえたいらしい。たとえば、『史学雑誌』掲載の「西周官制の基本構造」では、まず「字釈」に一節を設け、そこで金文文脈上の一字(𠄎)の字形の宋代以来の十一説を紹介したうえで、検討に値する説(「𠄎」に字形が定められ、「兼」の意味とする説)をとりあげ批判する。金文の構成要素(パーツ)の形から、妥当性を欠くとして斥けるのである。つぎに、唐蘭の『古

文字学導論』の手法にのっとって異体字を切り捨て、当該文字の標準形を定める。標準形とは、初形・初義を明確にしめす形、あるいは字源のはっきりわかる字形の文字のことである。この標準形を改めて検討対象としたうえで「𠄎は、酒や水などの液体を觚に入れ、両手に持ち、口を開けて吸む動作、すなわち『吸む』という字義」とし、「歃」の初文との新説を提出した。

觚という青銅器は酒を飲むための器とされるが、実用されたか否かが問題となっていた。觚の口縁が極端に開いているため、口をつけて飲むとこぼれやすいと考えられたり、使用するには「さじ」が使われたとされてきたのである。

ここで秀海さんらしさが発揮される。觚の実物大の模型を作り、できた模型に酒を入れて飲む実験をやったのでしたのである。「カクテルグラスと同じ程度あるいはそれ以上に飲みやす」といふ実験結果をのべている(当該論文注6)。そして、冊命金文に使用される「歃」は、「合」の意味として用いられ、文脈上、動詞としてもちいられる場合は「総撰」の意味に読み、名詞としては「正長」の意味に理解して、官制の統轄関係あるいは組織図について持論を展開したわけである。

木村秀海「文字学」の真骨頂は、このように、文字の形の表しているモノ、あるいはその形に対応するであろう文物の探求にあり、時には実験も辞さない姿勢を最後まで保ったように思う。文字解釈に、文化人類学や民族学などの成果を援用する方向は、積極的にはとらなかった。原則として、字形とその形の意味するモノとの関係を追究する姿勢であった。

ちなみに、秀海さんは動物の奇妙な生態にも詳しく、また子安貝のこと、トビウオの利用法、鶏の締め方、古代のノコギリの使用法、あるいは大麦の食べ方や調理法などについて、研究会席上、披露することがあった。博物学者の一面があったように思うが、秀海「文字学」と深く絡んでいたのかもしれない。

\*

一九九一年四月に秀海さんは関西学院大学文学部助教として任用された。これより先、前年（一九九〇年）四月に村上幸造さんが大阪工業大学に中国語担当として常勤の職を得、これより後、一九九二年四月に私が金蘭短期大学に歴史学担当として就職した。三者の主たる研究対象は、それぞれ金文学であり、古代音韻学であり、甲骨学であった。いずれも研究者が少数のため独善的になる傾向があり、バランス感覚を喪失する恐れがある。この弊害を極力すくなくする、という意味もあり、最後尾の私の就職を機に勉強会を立ち上げ、たがいに切磋琢磨し、研鑽を積もうとした。そうした熱意が、この時期のわれわれにはあった。

この勉強会は「鼎社」と名づけたが、この「鼎社」が、一九九五年十月から佐藤武敏先生の肝煎りで「殷周史研究会」として再スタートし、さらに二〇一二年四月二十一日から加地伸行先生のご指導とご助言によって「漢字学研究会」と改称し始動することになった。設立経緯については加地先生の「創刊の辞」（『漢字学研究（第一号）』）に詳しいが、白川学の、とりわけ不動の業績は「金文通釈」にあるとの認識が、秀海さんとわれわれにあった。「不動の業績」すなわち金文研

究の「バイブルのごときもの」とする理由は、われわれが金文研究に入る場合、必ず白川静先生の「金文通釈」から出発しなければならぬからである。この「不動の業績」の継統を念頭に研究会は新たに発足したといえる。当然、研究会の司令塔は秀海さんになる。秀海さんは会長兼会計、馬越靖史・佐藤信弥の両君を幹事とする体制で、研究会の運営ならびに本誌の編集に当たられた。第二号の発行とほぼ同時に他界されたが、本誌の「目玉」である「金文通解」の継統を願っておられたはずである。

秀海さんは最後となる研究会まで、家庭のご事情で一時期空白があったことなどを除いて、一貫して指導的立場で研究会を引っ張ってこられた。「漢字学研究会」の第二五回（殷周史研究会）としては第一七〇回）が最後になった。

「鼎社」から数えると二十三年間ということになる。木村・村上・末次の三人で始めたので鼎社と呼んだが、鼎の三本足の一本が欠落したのであるから、物を煮る用途としては廃物同然ともいえる。さいわい、秀海さんの薫陶を受けた関西学院大学出身者、馬越靖史君はじめ佐藤信弥・斎藤加奈・三輪健介などの諸君、また若い研究会メンバーがおられ、こうした新進の研究者が、研究会における秀海さんの「穴」を埋めてくれるはずである。

\*

秀海さんは友人を大切に思い、漢文を愛した。そして漢文講読を通じて、市井の漢文愛好家と誼みを結ぶ。

二十年以上にわたり、奈良日中友好学院の中国文化講座の講師を勤

められ、堤保仁さんとともに『太平広記』などの輪読や講読の指導にあたられた。この相棒である堤さんについて『訳注・太平広記（鬼部四）』（やまと崑崙企画、二〇一〇年）の「後記」で、秀海さんはつぎのように述べておられる。

「堤さんは私の一年先輩で、大学院の時代から共に酒を飲み、中国古代史について語り合う良き友人でもあった。論文の着想を得ると、奈良のまちいどの通りにあった四十五番という飲み屋で、閉店した後も語り合いながら酒を飲み、店主を朝帰りさせることも多かった。私が多忙になり、ここ数年堤さんに講座の指導を任せているうちに、堤さんは二度も心臓の手術をしながら、この講座の指導を果たしてきた。その堤さんが鬼部を全て指導し終えるのとはほぼ同時に亡くなられたことは偶然とは思えなかった。この鬼部こそが堤さんが天より与えられた仕事であり、堤さんはその畢生の仕事をやり終えて天に帰ったかのようにある」

『太平広記』鬼部の訳注は、こうした深い友情によって完結された。ちなみに、『太平広記』の訳注の下原稿を執筆したのは、木村・堤両氏の受講生であったが、この中国文化講座の受講生に「内藤湖南先生顕彰会」のメンバーがおられた。内藤湖南の終の棲み家となった恭仁山荘のある加茂町在住の方々を中心に、顕彰会は運営されている。とりわけ兎本恵宥・中谷裕亮両氏は生前の内藤戊申氏（一九〇八～八八年、湖南の三男）と親しく、いわば身内同様であったらしく、このご両人とのご縁で、内藤戊申氏の蔵書の大半が、関西学院大学図書館と千里金蘭大学（当時の金蘭短期大学）図書館に収蔵されるところ

となった。収蔵本には湖南旧蔵も多くふくまれている。関西学院大学蔵書については、秀海さんの資料紹介「内藤湖南・内藤戊申旧蔵殷周甲骨学金文学関係文庫」（『時計台』第五五号）がある。

＊

秀海さんは池上四郎（一八四二～七七年）の長女サトの曾孫、すなわち四郎の玄孫にあたる。池上四郎は薩英戦争（一八六三年）で活躍し、戊辰戦争（一八六八～九年）に参戦、西南戦争（一八七七年）の薩軍五番大隊長となり、西郷隆盛自決後、自刃して果てた猛者とされる。また軍事参謀としての「知慮周密」さを西郷隆盛が漢の高祖・劉邦の知恵袋「張子房（張良）」に比したとされるが、四郎の死後「追贈・名誉回復されたかは明らかではない」と秀海さんは述べている（『池上四郎年譜』『郵政考古紀要』三五）。西南戦争の歴史的評価の問題はさておくとして、秀海さんにとってご自身のご先祖のことであり、歴史的事実の確認とともに郷土の祖先に対する敬意と愛情、ならびにご一族の要望もあったのであろう、「池上四郎家蔵雑記」の翻刻と注『郵政考古紀要』三九、森田雅也氏との共著）も手掛けておられる。

＊

秀海さんは短所がなかったわけではない。「頑固というか偏屈なところがあった」。

先に述べた最初の学術論文（『西周金文に見える小子について』が発行される前に、ほぼ同様の主旨で、秀海さんは口頭発表をされた。一九八一年一月の阪神中国哲学談話会（阪中哲と略称）でのごことである。「殷西周の小子について―甲骨金文を中心として」というテーマ

であった。発表後、二次会に席を移動し「談話」に花を咲かせるのが、阪中哲の慣例である。この二次会席上で、私は秀海さんの発表内容に若干の物足りなさを感じたので、この旨指摘した。具体的には、「小子」を扱うのであれば、卜辞にみられる「小」のついた「熟語」には他例もあるもので、これらの諸例も検討対象にすべきであろう、というような指摘だったと記憶する。素直に「そうする」と答えるかと思いきや、木で鼻をくくったように「必要ない」旨の応答をする。そうした遣り取りを繰り返していたとき、隣でわれわれの話を聞いておられた木村英一御大が、私の「好意」に加勢していただき、それで秀海さんは渋々納得されるということがあった。「難儀な男やなあ」と私は思ったが、秀海さんも私のことを同じように「小うるさい」と感じたにちがいない。こうした自説の頑固なまでの主張は、「自信」とともにあったのであろう、一刀両断もお好きであり、小気味の良いときもあれば、「憶断」に近いというような場合もあった。

\*

西周史研究を使命とし、金文読解に情熱を注ぎ、郷土を誇り、ご先祖を敬し、人を愛し、酒を嗜愛し、ちょっと頑固であった秀海よ、さようなら。

合掌

（千里金蘭大学教授）

